2015.8.16　年間第２０主日

わたしは命のパンである

ヨハネによる福音　6:51-58

（そのとき、イエスはユダヤ人に言われた。）「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

　それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。イエスは言われた。「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」

説教

先週（第 19 主日）の説教を休んでしまいました。伝えたいみことばはあるのですが、なかなかまとまらず先週は時間切れになってしまいました。すいませんでした。

「わたしは命のパン」これがヨハネ福音６章の語るメッセージです。これは６章全体が語る主題です。奇跡のパンの出来事をヨハネ福音書はわたしは命のパンというイエスのメッセージとして解釈し、イエスの説教のかたちにして６章を通してわたしたちに語りかけます。

ところで「かろみ」ということばがあります。日本文芸の用語で芭蕉が提唱した俳句の技法として「さび」「しをり」「ほそみ」に続いて「かろみ（軽み）」があります。イエスのさまざまな奇跡をこの「かろみ」の視点からうけとめると、わたし個人的には理解しやすいと感じています。福音書を「かろみ」として読む、どういうことか、簡単にいってしまえば、あ～すごいなあ～、と子どものように受け止めてそのまま信じてしまうということです。パンの奇跡にかんしていえば、ヨハネ以外の３つの福音書では奇跡についてのコメントは記録されず事実があったことを淡々と記しています。マタイ、マルコの福音書では5000人と4000人という人数の違いだけで同じ奇跡が二回ほどあったと記録されています。事実のすごさに反して福音記事はかなりあっさりしています。それに比してヨハネ福音書では６章全部をつかってこのパンの奇跡に言及しています。「かろみ」の観点からみればちょっと重たすぎるとなります。ほかの福音書はかろみ的観点から評価すればマルです。なんでこんなに重く濃い内容になっているのかという疑問には、いろいろな答えがありますが、ヨハネ福音書がイエスの昇天後70年ぐらいたって書かれたから（4つの福音書の中では一番遅く書かれた）だという説明が私にはしっくりきます。今年はちょうど戦後70年にあたり戦争経験者が少なくなった、直接戦争を経験した人が戦争を語ることができない、ということが多く取り上げられていました。イエス後約70年後に書かれたヨハネ福音書もいまのわたしたちが経験している戦後70年の状況と似ていたかもしれません。戦争体験者が少なくなってきている＝イエス体験者が少ない、イエスを直接知っている人がいなくなってきている、ヨハネ福音書の作者はそんな状況の中にあって結構くどくイエスの事跡、奇跡を書き残したのかなあともおもいます。

5000人にあたえたパンとはわたしの肉だ、というのがヨハネ福音書の内容です。これが転じて、パンを食べるということはイエスを信じる、イエスを

受け入れることになります。そして「わたしの命のパン」を食べたものは永遠の命を得る、救われるのだと説きます。
話は変わりますが、わたしは礼拝が苦手で聖餐式がある礼拝の日はホッとする、といった教師がわたしの通っていた神学校にいました。これを聞いた時なんともたるんだ教員もいるもんだ、とわたしは早合点しました。教師は説教が苦手で聖餐は大好きともいっていました。また、説教がうまくなりたいのなら落語を聴けと奨め、わたしの部屋に来ればたくさん落語のテープがあるから興味ある人はおいでと誘います。授業後さっそくわたしは教師の部屋をたずねましたが留守でした。それから二度ほど訪ねたのですが空振りでした。落語コレクションは聞くことができなかったのですが、いまではその先生が言っていた「ホッとする聖餐式」の意味がよくわかります。（カトリックのミサ、礼拝では欠くことのできないパンの儀式ですが、多くのプロテスタント教会では月に一度しか聖餐式をおこないません）パンとワインがあればイエスが約束した救い、永遠の命にあずかることができます。牧師が語る説教は、まあそれとして、説教なんてしょせん人間がするもので（つまり間違いもありうる）、礼拝では神のことば＝聖書のことばを聞き、そしてイエスの命のパンに預かる、この二点があればいい、こんなふうにヨハネ６章から解釈することもできるのです。「ホッとする聖餐式」のある礼拝ではない聖餐のない礼拝ではみことばがメインになります。というより、みことばを解説した説教がメインになっています。礼拝時間の半分以上、一部の教会では８割から９割の時間を説教が占めることも少なくありません。これで救われるのか？（と自戒をこめて）疑問を感じます。

さいごに解説を二点ほど、まず一点目は人々の呼び方の変化です。
52 節に「ユダヤ人たち」とあります。6 章では 5000 人の人たちとイエスの間の問答という物語になっているのですが、その 5000 人の人たちの呼び方が「群集」「彼ら」「ユダヤ人たち」と変わってきています。この呼び方が

イエスを信じる度合い、バロメーターになっています。群集を 100 とすれば、彼らは 60 ぐらい、ユダヤ人たちは 30 から 20 ぐらいかなあ、当初イエスの元におしよせた群衆はパンがもらえるから押し寄せたのではなくイエスのはなしを聞きたいから押し寄せました。半分は奇跡を期待していたかもしれません。パンの奇跡のあとはイエスを担ぎ上げようとしたとも書いてあります。そこらへんから「彼ら」にかわります。わたしは命のパンとイエスが自己宣言してからはそれを疑う「ユダヤ人たち」に変わっています。
歴史的にみれば、多くのユダヤ人たちはイエスを信じることなくユダヤ教徒のままでした。イエスはユダヤ人でありながらユダヤ人に受け入れられることなく刑死しました。イエスを信じたのは異邦人たちだったと聖書は伝え、現在の歴史もそれを証明しています。
もう一つはきょうの福音の落ちになるのですが、それは第一朗読で読んだ箴言９章です。朗読では前半だけでしたが、オチは後半を読むとわかるようになっています。オチを解説するのはヤボなので引用だけにしておきます。かなり苦味のきいていて、つまずく人もいるかもしれないのでその時は読み流してください。

引用（箴言から）
愚かさという女がいる。騒々しい女だ。浅はかさともいう。何ひとつ知らない。自分の家の門口に座り込んだり／町の高い所に席を構えたりして／道行く人に呼びかける／自分の道をまっすぐ急ぐ人々に。「浅はかな者はだれでも立ち寄るがよい。」意志の弱い者にはこう言う。「盗んだ水は甘く／隠れて食べるパンはうまいものだ。」そこに死霊がいることを知る者はない。彼女に招かれた者は深い陰府に落ちる。箴言 9:13-18